

ピルジカイニド負荷試験はBrugada型心電図例での突然死のリスク評価に有効か

佐々木真吾* 樋熊拓未* 木村正臣* 小林孝男* 大和田真玄* 足利敬一* 奥村 謙*

*弘前大学医学部第二内科

【背景】

突然死の家族歴や失神の既往を有さず、Brugada型心電図波形のみを示す無症候性Brugada症候群での突然死のリスク評価に有効な指標はいまだ確立されていない。Ic群抗不整脈薬であるピルジカイニドはNa channelopathyを顕性化し、無症候例での突然死のリスク評価に用いられている。

【目的】

突然死のリスク評価におけるピルジカイニド負荷試験の臨床的意義について検討する。

【方法】

対象はBrugada型心電図を示す36例(男性27例, 女性9例, 平均年齢 56 ± 13 歳)。突然死の家族歴を有する12例(A群), 失神の既往を有する13例(B群), 心電図変化のみの無症候例11例(C群)に対し, ピルジカイニド負荷を行い, 経時的ST変化を観察した。ピルジカイニドは経口150mg単回投与または経静脈投与(1mg/kg/10min)で行い, 負荷後 V_2 誘導で2mm以上のST上昇を認めた場合を陽性と判定し

た。また, 36例中23例(A群8例, B群11例, C群4例)に対し心室細動(VF)誘発試験を行った。

【結果】

ピルジカイニド負荷試験陽性率はA群65.6%, B群72.7%, C群69.2%であった。ピルジカイニド負荷後のST上昇度は家族歴, 失神の既往の有無とは関連性がなく, VFの誘発が可能であった群で有意に高値であった。VF誘発試験ではA群75%, B群72.7%, C群50%でpolymorphic VT, またはVFが誘発可能で, VFの誘発性からみたピルジカイニド負荷試験の感度は91.6%, 特異度は77.7%であった。一方, VFの自然発作の有無からみた同試験の感度は80%であったが, 特異度(51.6%)ならびに陽性的中率(21%)は, より低値であった。

【結語】

ピルジカイニド負荷試験はBrugada型心電図例でのVFの誘発性からみたりリスク評価には有用であるが, VFの自然発作の独立した予測指標としてはさらなる症例の蓄積が必要である。

Keywords ● Brugada型心電図 ● ピルジカイニド ● 突然死のリスク評価